

ひとりひとりが笑顔になれる社会を目指して

阿波市立阿波中学校二年
大野里桜

「これじゃあ、あそこまでいけないね…」

「仕方ないね。それならここで、待っておくよ。」なんていう会話をよく妹と交わすことがあります。私と妹は双子で、現在阿波中学校の二年生です。妹は、生まれつき足が不自由で、普段は車イスに乗って生活をしています。そのため、行動範囲が制限されてしまうことがあるのです。

例えば、外出の際に階段しか設置されていなかったり、バリアフリー化されていなかったりする施設や交通機関は、妹にとつてとても使いにくいのです。

学校生活でも、校舎の上下階への移動はエレベーターを使っていますが、特別教室へ入るときは、段差や階段があり、車イスを降りて自分の足で歩かなければいけません。体育館への移動は、先生に付き添ってもらって昇降機を使わなければなりません。みんなが楽しみにしている学校行事でも、同じように活動できるわけではありません。しかしながら妹は、楽しそうに生活しています。

まずは、買い物の際に、高い位置に置いている商品に手が届かなかつたり、見えにくかつたりすることがあるそうです。欲しい物があっても、自分では取れないので、人に取ってもらわなければなりません。また、欲しい商品を探すのにも、人一倍時間がかかります。そのとき、学校で車イス体験をしたことを思い出しました。普段、生活しているときより視線が低くなり、同じ景色でも少し違って見えました。そして、それが車イスで生活する上での不便につながっていることに気づきました。相手の立場や視点に立って物事を考えることが、他者への理解の一步に繋がると思っています。

他にも、通路が狭かったり、少しの段差があったりすることで、行きたい店への入店をあきらめてしまうことがあるそうです。そのことで選択することもできないのです。私たちが当たり前に行っている『選択』という行為。それはとても素晴らしい権利です。しかし妹にとつては、その権利にも制限がかかります。物理的な条件をクリアしないところ、だれもが持っている当然の『選択』ができないところに、私は『不平等さ』を感じました。『不自由』はあっても、『不平等』はなくさないといけないと思いました。

しかし、辛いことばかりではないと妹は言っていました。通路に物が置かれていて、通りにくそうにしていたときに、

私は小学生のころに、腕を骨折したことがありました。利き手を骨折してしまった私は、板書をノートに書き写すことや、給食の時間にお箸でご飯を食べることや、ランドセルに荷物を入れることなど、今まで当たり前にならなくなってきたことが、スムーズにできなくなりました。私としてももどかしい気持ちになりました。そのとき、少しだけ妹の気持ちがわかったような気がしました。悪戦苦闘していた私を、周りの友達や先生が「大丈夫？手伝うよ。」と言ってサポートしてくれました。すると、私の心にあつたものどかしい気持ちは、いつの間にか消え、私の心は嬉しい気持ちでいっぱいになりました。

このような体験を通して、私が考えたことは、誰でもが暮らしやすい世の中にならなければいけないということだと思います。そこで、私はどのようなことに不便を感じるのかを妹に尋ねてみました。すると、改めて気づかされる点がたくさんありました。

そこに居た女の人が「大丈夫？」と声をかけて、困っていた妹に手を差し伸べてくれたそうです。学校でも、当たり前のようにノートやプリントを持って行ってくれる友達や、落とした荷物を拾ってくれる友達や、そっと車イスを押してくれる友達がいるそうです。人に親切にしてもらったとき、妹は「嬉しく、温かい気持ちになった。」と笑顔で話してくれました。そのとき、小学生の時に感じた私の思いと一緒にだなぁと知りました。そんな妹を見て、私も嬉しくなりました。嬉しい気持ちや優しい気持ちは、周りの人にも広がっていくのだなと思いました。

今、私に出来ることは、困っている人に声をかけて手伝うことです。物理的な不便をできるだけ取り除く手伝いをすることです。「こんな世の中になつて欲しい。」「このようになつて欲しい。」「と願うだけでなく、自分から行動を起こしていきます。そして、助けてもらった時の笑顔が関わった人への笑顔に広がっていければ、誰もが笑顔で居られるよりよい社会になつていくと思います。私は、私や妹を笑顔にしてくれる、阿波中の仲間が大好きです。今ある大切な仲間と、さらに深く繋がって、共に成長していきたいです。今ある私の周りの一人一人が笑顔になれる社会を目指して…。」

「普通」とは何か

東 朔太郎

高岡市立芳野中学校一年

僕の弟は、ダウン症という障がいをもって産まれました。ダウン症の人は、細胞の中にある染色体というものの数が普通の人より一本多いそうです。普通の人染色体は四十六本です。だから、ダウン症の人の染色体は四十七本あることとなります。

弟は世間では、「障がい児」と言います。また、僕のよくな障がい児の兄弟は、「きょうだい児」と言うそうです。僕は、そんな言葉があると知ったとき、悲しいような、悔しいような、何とも言えない嫌な気持ちになりました。弟も、そしてその家族である僕たちも「普通じゃない」と差別されているように感じたからです。

弟は八歳ですが、上手に話すことができません。代わりにジェスチャーを使って自分の気持ちを表現しています。でも、それ以外は「普通」の八歳と同じです。毎日ご飯を食べお風呂に入ります。学校に行き、家では宿題をしています。怒ったり泣いたりもします。そして、弟はよく笑い

るという当たり前のことをみんなが理解すること、自分とは違う人のことをもっと知ろうとする思いやりの気持ちが大切だと思います。そして、相手と自分との間に大きな違いがあったとしても、関わっていくことが必要だと思います。

僕には、これから弟と関わるときに心がけたいことが二つあります。一つ目は、手伝いすぎないことです。僕の弟は、さまざまなことをするのに時間がかかり、手助けが必要ですが、気持ちを伝えるときにも、ジェスチャーだけでは相手にうまく伝わらず、見ていてもどこかしくなります。そんなとき、僕はすぐに手助けをしてしまいます。でも、それは弟のためにはなりません。一人でできないことがたくさんあるまま大人になって、困るのは弟だからです。弟は、宿題をしていてわからなくなるとやめてしまいます。それを知っている僕は、答えを教えてしまいます。本当は自分で考えた方がいいと思うのに、つい教えてしまうのです。これからは、弟のために、見守ったり、やり方を教えたりしていきたいです。

そして二つ目は、人の気持ちを考えられるようにしてあげることです。今、弟は、自分のことに精一杯で、人のことを思いやることはできません。これから、いろいろな人と関わっていくために、弟には、人の気持ちを考えられる

ます。また、他の人がしないような勘違いをしたり、ユニークな動作をしたりして僕たちを笑わせてくれます。弟がいると、家の中が明るくなります。弟は我が家のムードメーカーです。

弟の「普通じゃない」ところを探そうとするうちに、何が「普通」なのかわからなくなってきました。僕は、「普通」の人なんていないのではないかと思っています。同じ人間なんて一人もいないからです。

世の中には、さまざまな差別があります。障がい者差別はもちろんですが、人種差別や性差別など、何年も前から問題になっています。僕は、差別は、自分とは異なる人を「普通じゃない」と決めつけるところから始まるのではないかと思っています。相手のことを知ろうとする前に決めつけ、関わろうとしないことが差別がなくなる原因なのではないでしょうか。

僕は、差別をなくすためには、人は、一人一人違っていいようにあってほしいと思っています。少しずつだと思いますが、されてうれしいことや嫌なことを教え、分かってもらおうと思います。

「普通」の人よりできることが少ない弟ですが、それでもできることはどんどん増えています。周りの人も、障がいをもつ人自身も「普通じゃない」と決めつけることなく、思いやりの気持ちをもって関わっていける社会をつくっていききたいです。

「人の役に立てたこと」

前田 咲幸

三重県立かがやき特別支援学校あすなろ分校 一年

学校に行きたくない。

それが三年生の頃の私でした。そして、四年生、五年生も学校へはほとんど登校することがなく六年生になりました。

その春に、新一年生と六年生で遠足に行くことになりました。歩く時のペアになったのは、車イスに乗っている一年生の男の子でした。買い物をしていた時に車イスの男の子がいるなあと思っていたその子が、なんと同じ学校に入学してきたのです。

男の子は長い距離の場合には、車イスで移動します。そのため、お母さんが車イスを後ろから押していました。車イスの親子の後ろを歩いていると、なぜか男の子のことが気になり始めました。名前は何だろう、話してみたいなという気持ちになりました。近くに行つて、驚かさないうようにそつと名前をたずねると

「はいせう。」

と名前を教えてくださいました。

「公園に着いたら私もいっしょに遊んでいいですか。」

「いいよ。」

と言ってくれたことが嬉しくて、その時のことをよく覚えています。

でも、車イスに乗っている子と遊ぶのは初めてで、どうやって遊んだら良いのか、上手に遊べるのか心配でした。

こうせいくんは、一人で歩けないので、一緒に手をつないで歩きました。滑り台に挑戦したり、ブランコに乗ったりしました。からだを動かしにくいので、遊びやすく、楽しめる方法をいろいろと考えて試しました。遊び方が分からなかったけど、こうせいくんが楽しんでいるので、

『自分の考えた遊び方は、合っていたみたい。よし！』と心の中でつぶやきました。初めは遊び方が分からなくて不安でしたが、少しずつ自信がもてるようになっていきました。

転んでケガをしないように気をつかいました。でも、それ以上に一緒に遊べたことやお弁当を食べたことが楽しかったです。何とも言えない嬉しい気持ちになりました。

私は、遠足で楽しい思い出ができた翌日から、次の日も、次の日も毎日一年生のこうせいくんの教室に行きました。最初の頃は、休み時間は遊んでいることが多かったのです。

そして、毎日教室に行っていたので、車イスに座る時の手伝いも上手にできるようになりました。こうせいくんは、足の治療のために装具を着けています。装具は重たいので、抱っこをして車イスに乗せてあげるのは、私にとっては簡単ではないです。それでも、

「さゆきちゃんー！」

と笑顔で呼んでくれるので重さも気になりませんでした。

ある日の体育で50 m 走をしました。こうせいくんが、50 m を一生懸命走っているのを見て

「頑張れ！こうせいくんーがんばれー！」

と、思わず大きな声で応援している自分がいました。バランスを崩さないように、ゴールまでしっかり走っていました。

学校に登校できなかつた私。

六年生になってからは、学校に登校できる日がとつても増えました。

『人の役に立っていること』

『人に頼りにされていること』

が、私のエネルギーになっています。こうせいくんのことを支えているつもりでしたが、反対に支えてもらっていたことに気がつきました。こうせいくんに出会えたおかげで、自分を発見することができました。

これからは、様々な人へのボランティア活動や交流をしていきたいです。